

巻頭文

感動にはじまる

谷川俊太郎

一九四六年私は十五歳でした。前年に日本は戦争に負けて、京都郊外の母の郷里に疎開していた私は東京に帰ってきました。いろいろ本を読んできましたが、詩にはほとんど興味がありませんでした。私が夢中になったのはクラシック音楽、なかでもまずベートーベンでした。

今ではアンティークになってしまいましたが、当時はゼンマイでレコードを回す蓄音機で、SPと呼ばれる黒い硬いレコードを裏返しながら、一枚一枚聴くのです。私は早い楽章よりも、ゆっくりして静かな楽章が好きで、全曲を聴かずに自分の好きのところばかり、繰り返し聴いていました。

音楽を聴いて胸がいっぱいなることを、いつ最初に経験したのかも覚えていません。た

だ私たちが日々体験している喜怒哀楽とは次元が違う「感動」という心の状態があることを知って、それに麻薬のようにとらえられ、感動できる音楽を私は探し求めるようになりました。

幼い頃には多分「感情」しか知らなかった自分が、思春期になって「感動」を知ったということは、自分の感性の自覚的な発見と言えるかもしれません。楽しいとか、悲しいとかいう心理ではとらえきれない心の動きが、それ以後私には何よりも大切なものになりました。

夕焼けを見てただ「きれいだなあ」と言っていた自分の心の深みに生まれる、すぐに言葉にはならないもの、訳も分からず涙ぐんでしまいそうなもの、そういう感動をもたらすものは音楽に限りませんでした、物語や詩にも、つまり言葉にも、そして星空にも海にも、つまり自然にも人を感動させる力があることを、私は知らず知らずのうちに気づくようになりました。

私が意識して〈詩〉を書き始めたのは十七歳を過ぎてからです、それ以前から私は音楽と同じように感動させてくれる詩が、少なくとも自分にとっての良い詩なのだと思っていました。と同時に胸がいっぱいになるだけが感動ではなく、微笑むことも大声で笑うことも、なるほどと腑に落ちることも、理解はできないけれど言葉の色や音の組み合わせを楽しむことも、

感動のうちだとだんだんに分かるようになっていきました。

何かに感動するとき、私たちは生き生きしています、生き生きすることで私たちはつかの間、世界と、宇宙とひとつになれます。



大人になるまでに読みたい 15歳の詩① **愛する**

巻頭文 感動にはじまる 谷川俊太郎 i

あたらしきページをめくる 5

初恋 島崎藤村／帰途 与謝野晶子／砂の上に… 落合直文／砂山の砂に腹這ひ… 石川啄木／宵待草 竹久夢二／雪くる前 室生犀星／無題録 高村智恵子／湖上 中原中也／爽やかな五月に 立原道造／山に来た雪 伊藤整／はたはたや… 山口誓子／音楽家の友への五つの詩 黒田喜夫／かそかなる… 斎藤史／だまして下さい言葉やさしく 永瀬清子／鉛筆を… 浜田康敬／あたらしき… 小野茂樹／恋人 坂本遼／ふたり 中江俊夫／フォークソング 内田良平／白オール… 香西照雄／はじまり 小池昌代／みちでバツタリ 岡真史

ああ接吻 45

春の貢 ダンテ・ガブリエル・ロセッティ／内なる香にこそ 岩野泡鳴／ああ接吻… 若山牧水／幸福 山村暮鳥／夜の唇 大手拓次／女よ 萩原朔太郎／室内 堀口大学／女よ 中原中也／悲歌 金子光晴／星があつて… 種田山頭火／あ

のひとはわたしに触れた… エミリー・ディキンソン／青空より… 寺山修司／雪はげし… 橋本多佳子／あをあをと… 久保田博／君帰れ… 塩谷温／あじさいの… 王紅花／口づけも… 小津安二郎／プレゼント 吉増剛造／ブラウス… 河野裕子／制服 井坂洋子／ブーゲンビリアの… 俵万智／食うものは食われる夜 蜂飼耳

妻恋へり 85

朝飯 千家元麿／暈 山之口貌／澄める町 安西冬衛／記憶 原民喜／幸福論 鮎川信夫／伝説 会田綱雄／空は太初の… 中村草田男／妻恋へり… 石田波郷／光子 菅原克己／朝日煙る… 金子兜太／除夜の妻… 森澄雄／私の前にある鍋とお釜と燃える火と 石垣りん／ふゆのさくら 新川和江／ここにして言葉は絶ゆと… 前登志夫／離婚届 谷川俊太郎／婚約 辻征夫／ユミは寝ているよ 友部正人

さよなら、さよなら！ 119

有る程の… 夏目漱石／レモン哀歌 高村光太郎／死のまへの… 岡本かの子／Colloque Mogueur 富永太郎／わかれを云ひて… 尾崎放哉／別離 中原中也／雪尺余 津村信夫／わかれ 中野重治／もの思ひのこと 井伏鱒二／てふてふさん 淵上毛銭／あるかんの死 森川義信／死者の時から 吉本隆明／ネロ 谷川俊太郎／失題詩篇 入沢康夫／かなしさは… 富沢赤黄男／死顔の… 石原八束／死に去んぬ死に去んぬ… 河野愛子／野にて裂く封書… 鷺谷七菜子／暗い五月に 清水昶

地上の愛 161

吾胸の底のここには 島崎藤村／春の朝 ロバート・ブラウニング／山のあなた カール・ブッセ／薄暮の曲 シャ
ルル・ボードレール／林檎畑 金子みすゞ／無題 村山槐多／なげき 堀口大学／草の上 三好達治／わがひとに与ふ
る哀歌 伊東静雄／田舎の夕暮 尾崎喜八／地上の愛 高見順／僕はまるでちがって 黒田三郎／木 田村隆二／地
球のうえで 清岡卓行／はりまや橋 山本かずこ／青空 大岡信／葉月 阪田寛夫／四月十四日 二十歳の原点 より
高野悦子／悲しげな少年が言う 高橋睦郎／美しい村 荒川洋治

エッセイ さまざまな愛のかたち 青木健 215

表記について

*収録した作品については漢字は新字で表記しました。／*仮名づかいについては、その作者の全集および作品集を参考にしま
した。旧仮名づかいの場合はそのままとしました。同じ語の繰り返しを示す「ゝ」「く」などの踊り字は改めました。／*ふ
りがなは底本としたテキストに付けられているものは、そのままとしました。読み方が難しいと思われる語には（ ）としてふ
りがなを付けました。／*作品の一部に、現在から見て人権にかかわる不適切と思われる表現・語句が含まれていますが、作者
の意図はそれら差別を助長することにはないこと、そして執筆時の時代背景と、文学的価値を鑑み、原文を尊重しそのままと
しました。

(編集部)

あたらしきページをめくる



初恋 — 島崎藤村

まだあげ初めし前髪(まげ)の
林檎(りんご)のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛(はなぐし)の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅(うすくれなゐ)の秋の実(み)に
人こひ初めしはじめなり

わがこころなきためいきの

*島崎藤村

(しまざきとうそん)

一八七二(明治5)年2月17日、長野県馬籠村(現・岐阜県中津川市馬籠)に生まれる。明治学院普通学部本科を卒業。一八九七(明治30)年に第一詩集『若菜集』を刊行。のち小説家となり、一九〇六(明治39)年に刊行した『破戒』で自然主義作家として地位を確立。以後、『新生』や『夜明け前』など、数多くの長編小説を発表。一九四三(昭和18)年8月22日、71歳で死去。